

文部科学省 平成27年度採択

大学の世界展開力強化事業

～中南米等との大学間交流形成支援～

「中南米地域における食・農・環境分野の実践的な専門家育成事業」

成果報告パンフレット



農 東京農業大学

事業の概要

2015年、文部科学省は、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力を強化する「大学の世界展開力強化事業」において、中南米等の大学との教育連携プログラムを構築する日本の大学に対し支援を行うことになりました。

この事業に、東京農業大学の構想「中南米地域における食・農・環境分野の実践的な専門家育成事業」が採択されました（採択件数：8件10大学／申請件数：25件32大学／私立大学単独採択は本学のみ）。本事業は東京農業大学と中南米の農学系大学との連携を強化しながら、既の実施している交換プログラムに農学系インターンシップを加えて総合的実学教育プログラムを実施し、中南米地域で活躍できる開拓（開発）型グローバル人材の育成を目指し、2015年度から2019年度までの5年間事業を実施してきました。この5年間では、毎年25～40名の中南米と日本の学部生が2週間から1年間の留学を経験しました。

2019年度で本学の世界展開力強化事業は終了しますが、中南米の協定校との交換留学は本学のプログラムとして継続して実施して行く予定です。

交流プログラムの概要

農大から中南米協定校への派遣

本学から中南米協定校4大学および農学系インターンシップ受入企業や団体への長期派遣（1～2学期）と短期派遣（2～3週間）

中南米協定校から農大への受入

中南米協定校4大学から本学における長期受入（1～2学期）と短期受入（2～3週間）および農学系インターンシップ（野菜工場、国際協力NGO、商品開発と販売の会社や団体等）



坂田 洋一

生命科学部・バイオサイエンス学科 教授
国際協力センター センター長
世界展開力強化事業 責任者

文部科学省の平成27年度世界展開力強化事業に採択された本学の「中南米地域における食・農・環境分野の実践的な専門家育成事業」が最終年度を迎えました。今年で創立128年となる本学と中南米の繋がりは古く、戦後に多くの卒業生が中南米諸国に移住し、国際的な地域開発に貢献してきました。

現在も地域のリーダーとして活躍する数多くの卒業生を中心とした海外校友会が中南米で結成されています。本事業では、中南米における本学協定校との交換留学プログラムに加え、海外校友会の全面的な支援を受けて農学系インターンシップを行い、「総合的実学」教育プログラムを展開しました。

この特色あるプログラムに参加した学生の多くは中南米地域に展開を行う、あるいは目指す企業への就職や大学院進学、あるいはJICA ボランティアへの参加とその進路を進んでおり、国際意識を高く持った人材へと育てています。近い将来に、本プログラムから中南米地域を中心に国際的に活躍するグローバル人材が輩出することを強く願っています。最後になりましたが、本事業をサポートして頂いた全ての方々に厚く御礼申し上げます。

本事業の特徴として、交換留学プログラムは派遣、受入ともに、次の要素を取り入れて実施してきました。

協定校における専門科目受講

派遣:協定校における授業を受講(長期は協定校より単位が付与され、本学で認定)
受入:本学で授業を受講(長期は本学で単位が付与され、4協定校中3校は認定)

農学関連施設見学

派遣:【ブラジル】NGO Asflora (アマゾン森林友の協会)、東山農場 / 【ペルー】国際ポテトセンター、国立農業試験場 / 【メキシコ】国際トウモロコシ・コムギ改良センター
受入:植物工場研究会、伊勢原農場

現地語研修

派遣:留学前の勉強会で現地語を習い、協定校または他団体における現地語の授業を受講
受入:本学における日本語の授業を受講
 ※本学においてラテン・アメリカンカフェも定期的に開催!

農学系インターンシップ

派遣:【ブラジル】トメアス総合農業協同組合、ニチレイブラジル農産物株式会社 / 【ペルー】カムカム協会 / 【メキシコ】日墨協会
受入:環境修復保全機構、メルカド東京農大、株式会社はだのふあーむ

現地学生との交流

派遣:短期では学生同士が互いに文化や日頃の学修成果について発表、長期は学修活動を通じて派遣先大学の学生との交流
受入:短期では「世界学生サミット」に参加し本学を含む海外の学生と食・農・環境について議論、長期は所属している研究室で日本人学生と交流

▶数字で見る世界展開力の成果

交流実績

年	国名	派遣人数	受入人数
2015	ブラジル	7	4
	メキシコ	2	2
	ペルー	2	2
2016	ブラジル	6	4
	メキシコ	8	3
	ペルー	5	2
2017	ブラジル	8	9
	メキシコ	6	20
	ペルー	5	3
2018	ブラジル	9	8
	メキシコ	7	23
	ペルー	5	2
2019	ブラジル	7	10
	メキシコ	6	27
	ペルー	5	3

事業開始前の5年度(2010~2014年)の交流実績
 派遣人数合計 30名
 受入人数合計 16名

事業期間中の2015~2019年度までの交流実績
 派遣人数合計 88名 **2.93倍増**
 受入人数合計 122名 **7.6倍増**

▶長期留学が学生にどのような影響を与えたか調査するため「帰国後アンケート」を実施しました。その結果を一部ご紹介します。

長期派遣

留学前の現地語のレベル

留学後の現地語のレベル

留学経験は就職活動中に役に立ちましたか

長期受入

留学前の現地語のレベル

留学後の現地語のレベル

留学経験は就職活動中に役に立ちましたか

留学体験で習得できたとする能力・資質

長期留学(派遣・受入)を経て長期留学(外部団体含む)に参加した学生の数は以下のとおり

派遣 ●長期留学: 11名 ●外部団体(トピタテ、JICAボランティア等): 4名
 受入 ●長期留学: 2名 ●大学院入学: 2名

派遣学生の就職先企業・団体、進学先一覧

・日産化学株式会社 ・合同会社西友 ・独立行政法人国際協力機構 ・クミアイ化学工業株式会社 ・日墨協会(メキシコ) ・農産物貿易
 ・ニプロ株式会社 ・株式会社 サカタのタネ ・株式会社センショーホールディングス ・東京農業大学大学院 ・北海道大学大学院

海外の校友会支部長よりメッセージ

原島 義弘 伯国東京農大会 会長

世界展開力制度によるブラジル実習生の増加について
 2015年の10月、当時の国際協力センター長の志和地先生から文部科学省に東京農大が採択され、農業関係の大学交流がより一層活発になる制度が始まる、と連絡があった。500人を越える農業実習生の受入れ実績のあるブラジル農大会の歴史に、ブラジルの農業大学2校との長期短期の交流を含めた相互の研修留学制度が加わり、早速2016年の2月から資金補助を受けた研修生の相互派遣が実施され、4年で延40名近い学生が、短期長期に常盤松会館を利用し、また南から北のアマゾン分会に至るまで、ブラジル農大会の校友達の活動に参加し、ブラジルを広く知る機会を与えたことは、将来に繋がる大変心強い制度と喜んでいる。国からの資金補助は今年で終了すると聞いたが、交換留学の制度は継続すると聞いており、今後もブラジルに留学研修に来る学生を暖かく迎入れ、見守り、指導して行く農大会を維持して行きたい。

インターンシップ受入団体の代表者様よりメッセージ

三原 真智人 地域環境科学部・生産環境工学科 教授 特定非営利活動法人環境修復保全機構 理事長

私が理事を務める国際協力NGOの特定非営利活動法人環境修復保全機構(ERECON)では、東京農大国際協力センターに協力して、「中南米地域における食・農・環境分野の実践的な専門教育事業」においてインターンシップを実施して参りました。具体的には、メキシコ、ペルー、ブラジル等のラテンアメリカからのVisiting学生を対象に、持続可能な農業発展や自然資源の利活用をテーマに、東南アジア諸国での開発協力事業の事例紹介に加えて、フィールドワークを通して堆肥・ペレット堆肥・バイオチャー・生物起源防虫液づくりと施用法等の資源循環型農法、農地での炭素貯留技術、日本の里山にみられる資源循環型社会の構造等について習得して頂きました。併せて、各々の母国の食・農・環境を取り巻く問題分析を踏まえて、Visiting学生が自ら立案した適用可能な開発協力事業について参加者全員で議論を重ねつつ、実践的な専門教育事業の一端を担って参りました。

鈴木 孝幸 カムカム協会会長 ペルー校友会支部 支部長

通常は国際農業開発学科の学生のみが農業実習に来ていますが、世界展開力強化事業により他学科の学生も来る機会が得られました。農業実習の場合は、自然や社会が日本とは全く環境の異なった場所でも上手くやっけていけるように厳しい指導をすることもありますが、世界展開力強化事業ではそのような指導に慣れてない学生もいると思い出来るだけやさしく、学生の希望に沿った実習内容にしてみました。参加した全ての学生が来て良かったと思っていただければ良いと思っています。ペルーの生物資源には全ての学科が関与出来ると思うので、これからもこのような制度があれば良いと思います。

中南米協定4校の事業担当者よりメッセージ

Prof. Dr. Festucci Buselli (ブラジル) アマゾン農業大学 生化学・分子遺伝学 准教授 国際センター センター長

本事業は本学にとって素晴らしい経験になり、ブラジルと日本の関係をさらに深めるものでした。本事業の参加者だけではなく、アカデミックコミュニティー全体に大きな影響がありました。本学と農大の連携が強化され、学生に文化的および学術的に影響を与えられたことは本事業の大きな功績だと思います。農大の学生がペレンに訪れた時はアサイーやブラジルナッツなどアマゾンの自然資源に感動していました。また農大の学生が来たことにより、本学の学生も日本に興味を持つようになりました。今後もこのパートナーシップが継続し、学生達がお互いの文化の理解を深めることができるでしょう。今後も農大と共に教育、研究、また他の取り組みにも展開しながら、多くの知識を生み出し、より良い世界に貢献できればと思います。最後に東京農業大学に心より感謝申し上げます。

Prof. Helaine Carrer (ブラジル) サンパウロ大学ピラシカバ校 植物生化学・バイオテクノロジー 教授 国際関係委員会 委員長

本事業のお陰で農業についてユニークな文化的、学術的交流が実施され、多くの異なる部分も相互に補充し合い、本学の学生及び教員にとってとても有意義な機会をもたらしてくれました。大学間の交流を活性化するために学生の交換留学は不可欠でした。学生達はそれぞれの国の農業や技術革新、現地語及び文化について学ぶことで、公私にわたる強い絆を築くことができました。この絆はきっと彼らにとって一生の宝となるでしょう。本事業の成功は農大及び本学の強い連携があったからこそ実現できたと思います。また本事業は始まりに過ぎず、今後もこの素晴らしい目的をもった取り組みは継続し、発展して行くことでしょう。

Prof. Noé Velázquez López (メキシコ) チャピンゴ自治大学 灌漑学科 教授

私は学士号をチャピンゴ自治大学で修得後、修士号及び博士号を東京農業大学大学院で修得しました。その為、本事業にとっても特別な思い入れがあり、農大及び本学との連携の強化に貢献することができたことを、とても光栄に思います。本事業のお陰で本学にとって初めての日本での学科研修旅行が実現され、ここ5年間で合計3回実施することができました。年々東京農業大学に興味を持つ学生が増えており、本事業は終了しますが、今後も交流が継続されることを強く願います。農大にはこれまでの多大なるご支援を賜り深く感謝申し上げます。

Prof. Roberto Ugás (ペルー) ラ・モリーナ国立農業大学 園芸科学科 教授

農大とラ・モリーナは20年協定を結んでおり、その学術的な交流が行われ、複数のラ・モリーナ学生が農大で長期的な研修を受け、斬新な日本の技術を学んできました。本事業のお陰でこの積み重ねてきた交流がさらに深められ、今後も実りある関係が続くことでしょう。本事業で最も大きな成果は日本とペルーの学生が活発に交流するようになったことです。好奇心を持ち、互いの文化を尊重し、多様性について意識を高めれば有意義な協議はできるということを学生達が証明してくれました。この素晴らしい機会を与えて頂いた農大に深く感謝を申し上げます。

伏見 和子 (国際食料情報学部 国際農業開発学科 4年生) 2016年度ペルー短期留学プログラム



沿岸部コスタにあるリマ、アンデス山脈が連なるシエラにあるカハマルカ、アマゾン川流域セルパにあるプカルパの3地域を訪れ、大学間交流や農大卒業生宅ホームステイ、現地農家訪問、カムカム協会の農場見学など、同じ国でも大きく異なる自然環境や文化を体験しました。短期留学を通して、自分の肌で現地を感じることの大切さを学び、現場をよく知る人間でありたいと思うようになりました。より興味をもった植物遺伝資源の研究に進み、大学院進学を考えています。また現在は、JICA海外協力隊短期ボランティアとして10カ月活動しながら(2019年2月~12月まで)、地域の食事習慣やホームガーデンの農業多様性の調査を行っています。



ラ・モリーナ国立農業大学内の農場実習

森 巧大 (国際食料情報学部 国際農業開発学科 4年生) 2016年度メキシコ短期留学プログラム 2017年度メキシコ長期留学プログラム



私は大学3年生でメキシコに半年間留学しました。留学に行こうと思ったきっかけは、①言語の習得 ②日本以外の文化を経験してみたい でした。現地では、他の留学生・メキシコの学生達とスペイン語で会話し、言語を習得していきました。また、サッカーや日々の生活を通して、言語以外の様々なことを学びました。留学後は、現地で知り合った友達とビデオ通話をするこ、メッセージのやり取りをするこで、スペイン語を忘れないようにしています。留学に行ったことで、様々な国の友達ができました。また、まだまだ知らないことが多く、もっと多くの国のことを知りたいと思うようになりました。その為、私は大学院に進学しようと思いました。私の所属している学科の大学院では、全ての授業が英語で行われ、生徒の8割近くが留学生なので、言語の勉強・様々な国の人との意見交換が可能です。ここで身につけた語学力・国際感覚を将来活かして、日本と海外の架け橋となるような仕事に就きたいと考えています。



ルームメイトとテスト勉強

内海 真登 (国際食料情報学部 食料環境経済学科 2018年卒業) 2016年度ブラジル短期留学プログラム 2017年度ブラジル長期留学プログラム



留学当初の目的はブラジルの農業を実際に現地で学び、日系企業の取り組みを学び卒業後の進路選択に繋げることでした。現地での活動内容は主に、①協定校での授業の履修 ②アマゾンにあるトマス農協での農業研修 ③ニチレイブラジルでのインターンシップが挙げられます。②ではアグロフォレスリーによるカカオや胡椒、アサイーの生産を40日間、実際の農場で学びました。③ではアセロラの生産加工から販売までのプロセスを約3週間、企業のインターンとして研修しました。留学後は就職活動と卒業論文の作成に取り組みました。ブラジルで大豆やトウモロコシといった穀物の大規模農業のスケールの大きさと可能性を感じ、より海外の農業に関わって仕事がしたいという思いが強まりました。そうした思いから農業メーカーに就職しました。現在の仕事は海外業務で主に農業の輸出業務を主に行っています。将来はいつか仕事でブラジルに戻ることが目標です。



ヘブリアの友人とその家族

中野 柚 (農学部 動物科学科 1年生) 2019年度メキシコ短期留学プログラム



短期留学に参加した目的は、発展途上国であるメキシコの畜産業について学びたいという点と長期留学を考えているのでその視察のために参加しました。現地では大学の実習場で行われる循環型の農業や加工技術を見学しました。またCIMMYTや現地の最大手酪農工場、中小畜産農家へ赴きメキシコ国内で行われる農業分野の視察と現状の把握ができました。ソチミルコと呼ばれる汚泥を使った水耕栽培農法を見学し、発展途上国における新たな経済的指針を含めた貧困農家に対する支援の方法を創造することができました。その方法をSDGs農大アイデアソンに出場し、貧困農家の新たな農業の可能性として“チナンバ農法”という題でプレゼンしました。この短期留学に参加したことで来年の夏からのメキシコへの長期留学に応募しました。



チャピンゴ自治大学の研究用牛

Edwin Llatas (ラ・モリーナ国立農業大学 農学科 2018年卒業) 2017年度長期留学プログラム



東京農大では日本人を含む、様々な国から来た学生と英語で行われる授業を受講することができました。国際農業開発学科熱帯園芸学研究室で研究活動を行い、またルームメイトが所属していた食品安全健康学科でも活動させて頂くことができました。日本語の授業では横浜や千葉など東京近郊について学びました。留学後は在籍大学に戻り、半年後に無事卒業し、仕事に就きました。留学中は家族から離れ寂しいですが、他の文化のことを知り、また物事を違う角度から見るのがとても大切だという事を伝えていきたいです。日本の大学院に進学したく、この1年は日本で留学するために様々な奨学金に申請してきました。現在は特別留学生枠に応募しており、東京農大でまた勉強できることを願っています。

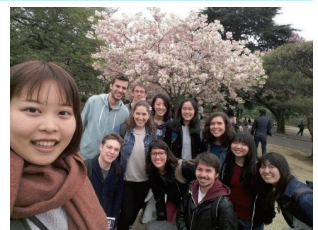


課外活動(高尾山)

Mariana Gomes Vicente (サンパウロ大学 バイオサイエンス学科 2019年卒業) 2017年度長期留学プログラム



東京農大では色々な国の学生と授業を受講し、所属していた造園科学科の研究室では人間と自然の関係について学び、公園、博物館、庭園や山など様々な東京近郊にある施設を見学したり、さらには有機農業と植林の推進に係ることができました。日本語の授業も履修し、日本の文化やコミュニケーションについて理解を深めることができました。また株式会社グランパファーム(新:株式会社はだのふぁーむ)の植物工場でインターンシップをさせて頂きました。帰国後に、名門大学のカンピーナス大学の修士号の教育プログラムに合格することができました。また、今年はニューヨークにある国連本部で開催されたECOSOC Youth Forum 2019にブラジル代表として参加することができました。このような貴重なイベントに参加できたのも世界展開力の留学で得た英語力のお陰だと確信しています。



課外活動(新宿御苑)

Mie Suzuki (アマゾン農業大学 森林工学学科5年生) 2018年度長期留学プログラム



東京農大に着いて、最も感心したことは研究室や授業、実習で森林工学分野に関する最新かつ有益な情報を得られたことです。留学中は沢山の山に行き、多くの農家の方の下で、野菜の収穫を手伝い、取った野菜と一緒に食べながらこれまでの歩みや知識についてお互いに話し合いました。私よりも感動したのは日本人の学生と先生方が日本の伝統、文化と環境をととても大切にしていることです。また、違う国から来ている留学生とも交流ができ、1人の人間として成長させて頂きました。私は現在アマゾン農業大学で最後の年を迎えており、同時にアグロフォレストリーシステムのパーム油プロジェクトの一環としてブラジル農業研究所でインターンシップを行っています。



研究室での送別会

Miguel Ángel Pérez Andrade (チャビンゴ自治大学 経済管理科学部4年生) 2018年度短期留学プログラム 2019年度長期留学プログラム



初めて東京農大に訪れたのは第18回世界学生サミットに参加した際です。この経験のお陰で農大が訴える有機農業の大切さについて知り、また日本での生産者と消費者の繋がりについても学ぶことができました。有機農業や日本の農業協同組合について知識を深めるため、また上級レベルの日本語授業を受講するため、2019年4月に私は5か月の長期留学生として農大に戻ってきました。留学中は環境修復保全機構でインターンシップを経験させて頂き、里山の重要さとアジア諸国における環境修復保全の取り組みについて学びました。現在はチャビンゴ自治大学農業経済工学科で学部生最後の年を迎えており、インターンシップ先のオレンジ農家が2020年には有機農場に移行できるようにお手伝いをしています。



課外活動(農家訪問)

中南米協定校との交流はまだ続きます！

短期留学プログラム

短期留学プログラムは、原則として夏期休業中もしくは春期休業中の2週間で実施します。海外協定校の施設に寄宿して海外協定校の学生との交流を行い、農村や農業関連企業、大学等を視察し派遣国の食農環境を学びます。2020年度も中南米を含む様々な大学に留学を実施予定です。この短期留学プログラムに参加し、所定の手続きを行った場合はインターナショナル・スタディーズ(二)の単位を修得することができます。

長期留学プログラム

海外協定校に本学の学生が半年または1年間留学するためのプログラムです。派遣留学生には奨学金として、渡航準備金が支給され、留学期間中は本学の授業料が免除されます。

募集は毎年秋(派遣時は夏)及び毎年夏(派遣時は春)に、学部1年次以降の者(派遣時は2年次以降)を対象に行います。選考は学内成績、作文、語学力、面接を総合的に評価し派遣学生を決定します。

海外協定校で修得した単位は帰国後所定の手続きにより学部生は他学科・他学部聴講修得単位合計30単位を超えない範囲で、大学院生は10単位を超えない範囲で卒業及び修了に必要な単位に加えることができます。

東京農大×SDGs



2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」は、貧困や格差、食料、栄養、環境、人権など地球規模の課題に対し、2030年までの達成を目指し掲げられた国際目標です。

東京農大は、1891年の創立時から「人類と生物と自然の調和により、豊かな社会をつくること」を共通のゴールとし教育研究を行ってきました。生命、食料、環境、健康、エネルギー、地域創成などの課題に対して、教育研究の理念「実学主義」に基づき、実社会との関わりを重視しながら取り組むことで、国際社会に貢献できる数多くの人材を、幅広いフィールドに送り出してきました。これからも、海外協定校等との交流を通じ、食・農・環境分野の実践的な専門家育成に取り組み、SDGs達成に貢献していきます。

お問い合わせはこちら

東京農業大学 国際協力センター

※国際協力センターは、2020年4月から「グローバル連携センター」になります。

tuacip@nodai.ac.jp TEL: 03-5477-2560

<http://tenkai.nodai.ac.jp/>

<https://www.facebook.com/NodaiReinventingJapan/>